

の埴輪よりも、外面二次ヨコハケ調整が多用される。東谷古墳群の笹塚古墳から離れた地にその次の大型前方後円墳である塚山古墳が築かれたのは、首長系譜の移動であると考えられてきた。その塚山古墳の埴輪に新しい要素が現れるのである。

そして、底部外面下端のナデ調整以外の要素は、さらに次の段階である塚山南古墳の埴輪には残らない。この頃、小山市に大型前方後円墳である摩利支天塚古墳が築かれ、ここでも、大型古墳营造地の移動と埴輪製作の変化とがつながっている。その変化には作業工程の合理化という方向性が認められるものの、そのきっかけは、製作者側だけで生まれるものではないのだろう。このように、古墳の政治的背景が変化する時、同一系譜と考えられる埴輪生産においても、連動した変化が起きているということが言えるのである。

平成一五年度早稲田大学史学会 公開シンポジウム

交錯する日米の日本研究

総合司会

西洋史学専修 竹本 友子

趣旨説明

東洋史学専修 李 成市

二〇〇一年に翻訳刊行されたジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』（岩波書店）は、日本において大きな反響をよび、その後もアンドルー・ゴードン編『歴史としての戦後日本』（みすず書房）や、ハー

バード・ビックス『昭和天皇』（講談社）などアメリカの日本史研究の成果があいついで紹介された。

これらのアメリカ人の手になる日本現代史に接して、われわれは歴史が一国の国民の独占物ではないこと、あるいは国民国家を単位に、自国民が自国史を再生産するという暗黙の了解が成り立ちえないうという歴史学のトランス・ナショナル化を改めて意識することになった。その一方で、一国史の立場から「われわれ日本人がなぜこのような研究を行ってこなかったのか」「日本人は憲法だけではない、現代史までもアメリカ人に与えられなければならないのか」といったリアクションがあったことにも注目される。

もともとアメリカ人研究者がアメリカ人読者に語りかけた著作が日本に翻訳紹介されることによって、日本人のナショナリズムが喚起されたのである。これらの著作に対する様々な反応がある中で、まず検討しなければならないのは、アメリカにおける日本史研究について、たまたま翻訳紹介された著作を日本の文脈で、その研究を判断するのではなく、それらの著作の社会的文脈や、それらを生み出したアメリカにおける日本史研究の実情をみきわめることである。岡本公一氏の「戦後における日米の近代史研究」は、そのような課題に答えようとするものである。

さらに、ここであえて提起してみたい視点は、国境を越える歴史認識についてである。今日のアメリカにおける日本史研究が必ずしも「国史」の存立基盤をゆるがすものとはなりえないことは上述の

ような反応の中にもみられるとおりである。そもそも近代日本の歴史学の形成過程においては、仮想されて「西洋」を意識しながら「日本史」「日本文化」を構想したという経緯があった。「日本史」「日本文化」の読者は欧米人であり、彼らの価値観にあわせて日本の歴史や文化が構想された。

ただ欧米のパラダイムが借用されたというにとどまらず、近代日本の人文学は、いわゆる「お雇い外国人」研究者によって主導され、そうした学問的な方向づけは、その後の研究のあり方を規定した。たとえば、日本列島の石器時代の人々を先住民族とし、新たな文化をもった民族が先住民族を駆逐して今日の日本民族が形成されたとする「民族論争」は、モースやシーボルトらの外国人研究者の影響によるものであった。菊池徹夫氏の「異文化へのまなざし—E. S. モースの見た日本」は、日本の歴史学、考古学に多大な景況を及ぼしたアメリカ人・モースに着目し、欧米から注がれた日本への視線、欧米の日本人論の系譜にも言及するものである。

近年、日本の学界（とりわけ人文社会科学）では、英語圏への発信を意識し、そのような学術活動が推奨されているが、はたして日本と欧米との学術交流は、歴史認識の脱国民化につながるだろうか。むしろその前提を強化し、前代以来の枠組みを強化しあう共犯関係とならないだろうか。国民国家の形成期に形づくられ、その過程で成立した「国史」の脱構築は、歴史研究に携わる者の課題と思われるが、欧米のまなざしを意識した一国史という枠組みは、欧米研究

者との学術交流の中で、逆に保証され、強化されることにはならないだろうか。

そこで近藤一成氏には、日本とアジア諸国との関係で、あるいはアジアからのまなざしから照射したときに、交錯する日米の日本史研究はどのようなこととらえることができるのかについて発題していただくことにした。また、すでに「日本人を語る二つの方法」〔『史観』一四八号〕でダワーの著作に言及している犬飼裕一氏には、アメリカ人にとっての他者認識として日本を問うだけでなく、同時に日本人の日本認識をも検討したくつもりである。

以上を通して、このたびのシンポジウムでは、アメリカ人研究者による日本史研究を事例に、近代における自国史の成立から、国境を越えて研究交流が深化している現在までの歴史学研究の「自己」と「他者」について語り合ってみたい。

報 告

交錯する日米の日本研究

—戦後における日米の近代史研究—

国際教育センター 岡 本 公 一

「外から見た日本」など、「外から見た」という修飾語を付したタイトルの定番化した企画が、日本論ブームと相俟って、一九九〇年代に至るまで、一般ジャーナリズムのみならず、歴史学のような